

とちぎユースサポーターズネットワーク共同代表

岩井 俊宗

とちぎ



「69万9000人」

「5・7%」

何の数字かおわかりだろうか。「69万9000人」は15、39歳のひきこもりの推計人数（2010年、内閣府調査）。「5・7%」は25〜34歳の完全失業率（11年6月、総務省調査）だ。現在の若者が置かれている

若者の意欲育む「学校」

共感できる「仲間」——が必要だ。

とちぎユース

的な社会参加の機会を提供し、体験と学びを通して若者が次の一歩を踏み出すための意欲と力を育む学校だ。これまでに42人が卒業し、その約7割が就労進学へと自らの力で歩みだした。

初めは声を出すこともなく、

目も合わせない若者。彼らの現状と成長を見てきた。若年無業者と言っても、それぞれの状態、きっかけ、要因は多様だ。しかし、総じて自信がなく、自分の存在価値を感じられず、自己肯

だろうという他力本願の期待が生まれても、結局は自分の足で歩くしかない。その事実を「閉じた」若者に認識してもらうには、言葉だけでは届かない。重要なのは、彼らの思いと力を信じる家族以外の第三者の存在である。

若者の成長には、①安心して自分と向き合える時間②過去ではなく未来を見てくれる第三者との関わり③「期待」と「頼り」にされる経験とそれに応えようとする行動④状況を理解し合い、

社会のある断面である。この数字の背景に、一人ひとりの若者の苦しさや不安感、苦悩があることを読み解かなければならぬ。

我々は、2009年から社会的に孤立している若年無業者（ニート、ひきこもり等）を対象に小さな学校「とちぎユースワークカレッジ」を地域と連携して運営している。実践

定感が低い。社会や他者に対する漠然とした「恐怖感」、仕事にも学校にも所属がない「不安感」が強く、自分の居場所を見いだせないまま閉じてしまっている。「このままではいけない」と頭ではわかっているものの、動き出せない自分をさらに責め、苦しんでいる。

長い時間、苦しみ続けてきた結果、誰かが救い出してくれる

スワークカレッジでは、実践的な社会参加の中で人生の先輩と交流し、多様な生き方に触れる。意志のあるところに道ができるのだと実感する。そこから、若者自身に「意志の種」（未来を自分の足で進もうとする思い）を生む。他者と心を通わせることのできる社会の中で、若者は大きく育つと実感している。